

<b>Title</b>	都市における小売業：都市計画家 石川栄耀の取り組み
<b>Author</b>	濱、満久
<b>Citation</b>	経営研究. 56(4); 307-328
<b>Issue Date</b>	2006-02
<b>ISSN</b>	0451-5986
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学経営学会
<b>Description</b>	

Osaka City University

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to  
Osaka Metropolitan University

# 都市における小売業

—都市計画家 石川栄耀の取り組み—

濱 満 久

1. はじめに
2. 都市観の形成－法定都市計画を超えて－
  - 2.1 都市計画制度の成立と都市観形成のきっかけ
  - 2.2 郷土都市を目指して－小都市主義－
3. 盛り場論の生成－郷土都市の中心として－
  - 3.1 都市における「賑やかさ」への着目
  - 3.2 盛り場の中心としての商店街
  - 3.3 盛り場論における二つの視点とその扱い手
4. 盛り場論の実践－名古屋での取り組み－
  - 4.1 広小路－街並みの問題とその対応－
  - 4.2 大須－商店街の拡張と賑わいの創出－
5. おわりに

## 1. はじめに

商業・流通分野において「まちづくり」が重要な課題として認識されている。それは単なる商業振興に留まらない、小売業を地域社会に位置づけて捉えなおすことを意味する。つまり、まちづくりは総合的視野を求め（石原、2005a）、必然的に他分野との連携を必要とする。そのなかでも都市計画は最も重要な分野のひとつである。この必要性が浸透したのは「まちづくり3法」が成立したころであり、それほど古いことではない。しかし、すでに1970年代には「商業近代化地域計画」など都市と商業の連携を図る動きがあった。このことは反面で未だに模索の段階にあることを示しており、それがいかに困難であるかということを如実に物語っている<sup>1)</sup>。したがって、本稿もこの商業とまちづくりという古くて新しい問題に、何らかの示唆をもたらすことを目的としている。そのためには都市と小売業の接点がどのようなものか、ということを明らかにすることが重要である。そうすることなしに、このきわめて現実的な問題を議論することはできないだろう。では以上の課題に対して、本稿ではどのように接近するか。

具体的には、わが国都市計画の草分けである石川栄耀（1893-1955）が戦前に展開した「盛り場論」を取り上げる。石川は「旧都市計画法で最も功績があり、かつ、最も典型的な旧法下の都市計画技官」であるとともに、一方で「法定都市計画だけでは、いい都市はつくれないと氣

づ」き、「法律の外の法外都市計画」としての盛り場論を展開した人物である（川上他、1993、188-189頁）。しかし、石川に対する後者の認識は「当時としてはユニーク」（同上）とされるのみで、その意義についてはほとんど顧みられず、ましてや、商業の分野で取り上げられるることはなかった<sup>2)</sup>。では、なぜ商業の分野として本稿がそれを取り上げるのか。

戦前の中小小売商問題の対応には商業組合によって組織化を図るものと、都市計画の見地から都市美を目指すものとがあった（川上、1937）。前者は戦後の流通政策にも連なるもので、商業・流通分野で一般的に理解されている対応である。一方で後者は商店街の美醜・盛衰が都市の美醜・盛衰を現わし、したがって都市を繁栄させるために商店街を繁栄させていくという対応である。実はこの代表的な存在こそが石川の盛り場論であった。つまり、それは単なる商業振興ではない街を繁栄させることを目的としたものであり、まさに最初に述べた「まちづくり」という取り組みだったのである。このことから、盛り場論をあらためて現代に取り上げることは、単に本稿の課題であるという以上に意義がある。すなわち「商業とまちづくり」という困難でありながら、商業論・都市計画で今もっとも求められている課題としてである。このことは、ここでの分析作業がその課題への取り組みとなることを意味している。

さて、ここで若干の分析視角の設定をしておく。まず、石川の都市計画活動はいくつかに時期区分されるが<sup>3)</sup>、本稿ではその内の名古屋時代（1920-32）に焦点をあてる。なぜなら、この時期は都市計画制度の揺籃期でもあり、同時に石川にとっても都市計画活動の開始期でもあるからである。盛り場論が形成されたのは、まさにこの時期であった。それが、なぜ・どのようにして形成されたかを考えるには、この時期を取り上げることが重要であると考える。具体的には石川が法定都市計画を超えてどのように都市を捉えたのか、またその都市における小売業、特に商店街をどのように捉えたのかをみる。最後に石川の軌跡を総括することで、現代の商業とまちづくりという課題への示唆を指摘したい。

## 2. 都市観の形成－法定都市計画を超えて－

### 2.1 都市計画制度の成立と都市観形成のきっかけ

石川は、1920（大正9）年に都市計画地方委員会の技師として名古屋に赴任した。当初、東京希望であったことから「少からずラクタンした」ようであったが、「それは、名古屋の都市としての最上昇期であり、又名古屋市民の闊達性は我々に何でもさせてくれたので、此れ程好い研究室は無かった」と振り返っている（石川、1952、33頁）。この時期は石川の都市観の形成において重要な影響を与えたことが推察される。

実際、当時は全国的に急激な都市化にあり、名古屋においても例外ではなく（表1参照）、石川はまさに「都市としての最上昇期」の名古屋で都市計画家としてスタートをきった。

またこの時期は、旧都市計画法（1919年）制定の翌年である<sup>4)</sup>。「日本の都市計画史は解説のし様によっては明治何年（21年－筆者）からの市区改正・・・になるが、外国流の地域、

表1：愛知県および名古屋市域人口

	1913年 (大正2)	1918年 (大正7)	1920年 (大正9)	1925年 (大正14)	1930年 (昭和5)	1935年 (昭和10)
市域人口	432,043	436,699	619,529	783,734	926,141	1,110,314
県人口	2,073,314	2,140,077	2,089,762	2,319,494	2,367,413	2,862,701

出所：名古屋市（1953）『大正昭和名古屋市史 第1巻』119-120頁より作成

交通、緑地、総合の・・・機構をセイビしたのが（大正一筆者）9年である」（同上）。つまり、わが国近代都市計画の揺籃期であった（石田、1987）。明治維新以来、資本主義体制が築かれるなかで、都市型産業が急成長し都市拡張の時代となる。都市計画制度はそれに計画的な対応をするために制定された<sup>5</sup>。その基本的発想は生産が中心であり、都市は生産圏として捉えられていた。それが当時の主流な都市観であった。

このような都市観は石川においても例外ではなかった。しかし、石川はこれを大きく変化させる二つの重要な経験をする。まず一つには1922年の欧州への海外出張である。この出張では二つの重要な気づきがあった。第一は、「イギリス都市計画の父」とされるアンウイン（R. Unwin）と出会ったことである。その際、石川は自身の都市計画案を披露するが、アンウインに「君のプランにはライフが無い。水際は市民のライフのリソースだ。そこを全部工業にする様では工業も解ってないと云って好い」（石川、1952、37頁）として完全に否定される。生産のためではなく、豊かな生活文化のための都市を計画すべきであるとの指摘であった。このことにより、石川は都市において「生産中心」が常識ではないとの気づきを得た。そのことと関連するが、第二の気づきは日本の都市とのもっとも大きな違いが「広場を中心とした都市が出来ると云う事であった」（同上、38頁）。つまり欧州都市は工業中心ではなく、むしろそれとはある種対極にある「広場」を中心として存在していたのである。以上のことから海外出張の経験による二つの気づきは、石川に生産中心から人生・生活を中心とした都市観を形成する重要なきっかけとなった。

石川が新たな都市観を形成する上で重要であったもう一つの経験とは、帰国した翌年の商店街との出会いである。石川は、長野県上田市から都市計画を委嘱されたのであるが、それは「外国土産そのままと云う案」（同上）であった。その内容には商店街と並行して駅に直結する幹線道路が提案されており、これが地元商店街の商業者から反発を招くことになる。商業者に対する説明集会では、彼らからの反発に石川は全く答えることができず演壇で立ち往生してしまったのである。この経験を通して石川は「此れで自分は『都市に於ける商店街』と云う現象に対し、ウカツであった事を自省した。／それ以来、此の妙な存在に対し臥薪嘗胆の研究を重ねる事になった」（同上）。これをきっかけとして、現在以上に行政など一部のエリートや専門家が強い時代にあって、石川は住民や商業者を巻き込む、いわば現場主義の発想をもつようになった。以上のように、石川は二つの経験をきっかけとして、生活圏としての都市観を形成

はじめ、現場を軸とした活動を展開する。

海外出張後、石川はアンヴィンに強く影響を受けて、都市観を改めるための思索を重ねていくが、それを単なる焼き写しとはしなかった。その理由として、「ただ私は、小田内先生（小田内通敏－筆者）の影響を受け人文地理学的であったので先ず日本を知る事だと云う様な考えを漠然と有ち、名古屋を研究すべしと云う気持ちに転じて行った」（同上、34頁）とする。ここに石川の独自性の一端がみられる。つまり「郷土都市」の発想は、アンヴィンに強く影響を受けながらも、そこに日本の（名古屋的）都市をいかに構築するかを考えるものであった<sup>6)</sup>。

しかし、現実の都市計画制度は決してそうではなかった。旧都市計画法の事業主体は国であり、全国に一律の基準を適用するきわめて集権的なものであった。したがって、たとえ欧米諸国の計画技術を手本としていても、自治体主体であった欧米のそれとはまったく異なっており、その意味で「日本は極めて特異な都市計画制度」（石田、1987、116頁）であったということができる。また、だからこそ石川にとってのアンヴィンとの出会いは、それまでの都市観に疑問を抱かせ、彼独自の都市観を形成していくきっかけとなったのである。以下では、それがどのようなものか、またどのように盛り場論へと至るのかについて考えていく。

## 2.2 郷土都市を目指して－小都市主義－

石川独自の都市観ないし都市計画觀が形成される主要な思索の場となったのが、1925（大正14）年4月に設立された「都市創作会」という研究会であった。同会は都市計画地方委員会などの関係者によって組織され、愛知県都市計画課内に設置された。当初は都市習作会と称しており、毎月例会を開催し専門家たちによる講演や研究発表が行なわれていた（都市創作会、1925b）。同年9月より石川を中心として「書斎より巷に出」（同上、51頁）で、より実践的で広範な取り組みをすべく都市創作会と改称された<sup>7)</sup>。このときから機関誌『都市創作』が毎月発行されるようになり、石川の都市計画の思索が展開されていく。同誌は、都市でおこる問題がすなわち社会の問題となっている現状に対して、これまで人文地理学や経済学の閑話的な対応でしかなく、それに対処する専門としての「学」が不在であったことを訴える。さらに、その専門家として当時誕生して間もない都市計画家こそが、それを担うことを目指すべきとして発刊された（都市創作会、1925a）。

石川は同誌において、「いつか自分は此道樂の手記とでも云ふ可きものを甚だ呑気な気持と氣楽な形式とでまとめたいと」（石川、1925、17頁）述べているが、ほぼ毎号に及ぶ積極的なものであった。そこでは「郷土都市の話になる迄」というテーマの下、石川独自の都市観が形成されていく。以下では、石川の一連の論考に依拠して都市観の形成を眺めていく。

まず石川は問題意識を当時の都市計画が、その土地開発に際して「個性を無視して一様に或型に入れてしまふ」と云ふ（同上、19頁）やり方になっているのではないかとの疑問から展開する。石川は「よく精細にその『都市的価値』と云ふ眼で点検すればどの一坪の土地にも土

地的個性（質的個性）及び位置的個性がある」（同上、18頁）はずだと主張する。しかし、実際はいたずらに都市の無秩序な大規模化を追ってしまい、無個性化が進展していると指摘する（石川、1926a）。

さらに問題はそれだけではなく、「大都市が量に於て市民をして互に親しむ集団意識を抱かせる範囲を越へてる事。／また大都市人の性質が・・・隣人を親しませぬ事」（同上、10頁）から「騒がしさの中の孤独」（石川、1927a、40頁）をもたらしているという。つまり大都市化によって「統計にはあらはれぬ・・・『人間味』の亡失」（同上、45頁）が最も恐ろしい作用としてあらわれてくると警鐘を鳴らす。彼は、人間は本能的に人とふれあうことを求めており、またそれが必要であると主張する。例えばカフェの存在があり、また公園や公会堂といったものは、ほとんどの大都市にも存在する。それらはまさに人が人とふれあうことを目的とした施設である。すなわち、それらの存在はたとえ無意識的であったとしても人々がふれあうことを求めているということであり、またそれが必要であるということの表れなのである（石川、1926b）。それが可能な範囲を「愛の半径」<sup>8)</sup>と表現し、「お互に顔の見知りあえる程度」（石川、1927a、46頁）の規模として想定している<sup>9)</sup>。「その限度をこへて大勢に（ママ）なると急に人々はかへってさわがしい赤の他人に返ってしまう」（同上、45頁）ことになるからである。

以上のことから、石川は都市の膨張における都市の無個性化、「人間味の亡失」というコミュニティの崩壊に対応するには小都市主義であることが必要だと主張する。つまり、小都市であるからこそ「土地の有つ個性——郷土性を最高く自由に表現」（同上、47頁）することができるとする。

ここで、石川の小都市主義は単なる前時代的な地域共同体の復古を主張していたのであろうか。たしかに彼は「大都市を亡ぼさなければならない」（同上）というかなり過激な発言をしているが、それは字義どおりに理解されるものであるのか。もしそのようなイメージだとすれば、それが非現実的であることは容易に理解されるだろう。そこで、石川が小都市主義をどのように捉えていたのか、その意味を詳しく見ていくことが必要である。

石川は都市の膨張による弊害に対して小都市主義を主張したが、一方で大都市が何ともいえない人を惹きつける力を有していることを認めている。例えば自身の経験から「自分が東京に對して抱いて居たあこがれから推して、決してそれがそんな数理的なものでなく、もっと人間的な、もっと心理的な、本能程に單的な動機」（石川、1926a、9頁）であったことを述べている。また「田園人達は単純にひかれて大都市の懷に飛び込み、やがて一度は此に幻滅を感じるが、長く住む中には遂に一種異状な執着で瞬時も離れがた」（同上）くなるとする。もう十分だろう。石川は決して字義どおりに大都市を否定しているのではない。その存在を現実として受け容れた上で「大都市のかうした人間性の深所に根ざした魅力を認めると同時に、他の半面にひそむ氷の様に冷たい乾いた生活感の味のある事をも見のが」（同上）さないことこそが重要だとする。つまり大都市か小都市かという単純な二分法ではなく、問題はいたずらな大都市

化の状況であり、すなわち都市の無個性化・コミュニティの崩壊であった。

本来であれば、それに対処するのが都市計画制度であり、専門家としての都市計画家であった。しかし、石川は自身を含めた都市計画家・制度を省みたとき「法の形骸によってのみ動いてる我々の仕事は結局『大都市を栄へしめよ』に過ぎ」ず、それは「小都市をして大都市の餌食たらしめ」ことになっていたと指摘する（石川、1927a、47頁）。つまり都市計画制度そのものが、「大」都市計画となっており、むしろ問題を助長してしまっているというのである。これが、まだ都市化の進んでいない時代であれば「徒歩距離面積の中の、平穏な家屋の集積にすぎなかった」ことから「左して恐れる程の又、それ程、責任に悩まなくてもよかった」が、「今は違ふ。我々の手に渡された都市と云ふものは実にもう、測り知られぬ複雑さ」をもち、一つの失敗が取り返しのつかない結果をもたらしさえする（石川、1927b、4-5頁）。このことは法定都市計画だけでの対応には限界があるということを意味している。つまり、制度だけをもって「郷土都市」を実現することはできないということである。

そこで石川は都市計画家のとるべき対応として「小都市主義の都市計画」（石川、1927a、48頁）を主張した。これは実質的に大都市計画となっている制度だけでなく、一方でその中に小都市的なものを回復していくことで、起こりうる問題をできる限り防ぐことを目指すものである。具体的には「都市はたくさんの町のあつまり」であり、それぞれが「一つの中心を」を有した有機的集合であることが望ましいとする（石川、1926c、36頁）。このことからも、石川が捉える小都市主義とは、大都市を否定して復古的に小都市化するという平板な意味では決してなく、法定都市計画を超えて現実的な対応をしようとするものだということがわかる<sup>10)</sup>。小都市を重視しているのは過剰な大都市化という状況に対してであり、決して「小都市をして大都市に采ってかはらしめ様と云ふ」（石川、1927a、48頁）のではない。

以上、石川は大都市化の抱える問題に対処するには制度を超えた小都市主義の都市計画が必要であることを主張した。つまり都市化という現実に、それを抽象的に捉えてしまうことで大都市か小都市かという単純な二分法の議論に陥るのでなく、あくまで現実に根ざした小都市主義という対応が郷土都市を実現させるのに必要だと考えたのである。

### 3. 盛り場論の生成—郷土都市の中心として—

#### 3.1 都市における「賑やかさ」への着目

前節では都市を現実レベルで捉えることの重要性が指摘された。しかし、石川はそう捉えようとして次の悩みに直面する。それは「都市とは何ぞや」（石川、1928a、19頁）という根本的な内容についてであった。なぜなら、小都市主義では都市を抽象的なかたまりとして捉えるのではなくそれを具体的に捉えようとすると、各小都市が考察の対象として重要になるからである。その小都市を一つの区域として認識させる「中心」とは何かを考えることが、小都市主義の都市計画をより具体的にするためにも重要になる。石川の関心は都市を都市たらし

めている「中心」とはいかなるものか、ということにつながっていった。

まず一般的に都市とは何かといったとき、意識的、無意識的にも「集散施設の中核」（石川、1928a、19頁）という捉え方をされる。しかし、極論ではあるが人のいない巨大ターミナルだけで都市だとは決していえない。都市は抽象的な機能や施設の集合だけではない。石川は、それにもかかわらず法定都市計画が暗黙的にそのような「都市」を想定していたのではないかと考える。つまり、あらためて「都市とは何ぞや」と自身に問いかけることで、それまでの制度が実は都市をどのように捉えるべきかということについて、深く考えていなかったと気づく（石川、1928a）。そのため「都市計画」家は、その名称に対していかにも上滑りであったと指摘する<sup>11)</sup>。

それに対してアンヴィンとの出会い以降、人生・生活を中心とした都市観であった石川は、まったく独自の捉え方をする。それは都市の本態として「賑やかさに眼をつける」（同上、20頁）のである。彼は、それを「人間が遊楽的施設につゝまれ、その気分の中にあって集団的気分に酔ふ事」（同上）と定義し、都市とはその中心部において周辺部とは判別できる賑やかさをもたらす施設・雰囲気を行しているものとする。つまり、石川にとって都市を都市たらしめているのは「賑やかさ」であり、したがって、都市計画の目的とはそれを生み出すことであるとの主張であった。このことは「集散施設」を対象としなくてよいという意味では決してない。これまでのような都市の捉え方だけでなく、その中の「賑やかさ」までを含めて捉える必要があるということである。なぜなら、結局はこの「集散施設」によって人が集まり「賑やかさ」が生み出されるからである。

石川は、それまで都市の主要な要素とされていた「集散施設」を都市の「副要素」に、また「賑やかさ」をその「主要素」として位置づけなおす（同上、20-22頁）。これはどのような意味においてか。彼の考える最も理想的な都市とは、人々が親和、すなわち先の言葉でいう「愛」を基調とした遊楽気分（賑やかさ）によって結び付けられる都市である。つまり主要素のみで成り立つ都市を理想とする。しかし、「それ丈で、独立自営の都市を成し得るであらうか。都市は都市自体の目的によって自立し得るであらうか」（同上、29頁）として、現実的に困難であることは彼自身も理解していた。なぜなら、彼の理想とする「遊楽気分とは実用価値をはなれ、生を楽しむ気分」であるが、現実的には「現代都市の基調となっている遊楽は購買に対する賭博的興味」となっており、すなわち「愛は収入を呼ばない」からである（同上、21-29頁）。つまり、実用価値を完全に切り離すことはできない。むしろ、購買という実用価値を媒介して初めて遊楽を得ることができる。そこで「都市は主要素がそれ丈で独立する事を許されない限り、諸機能の複合」（同上、30頁）、すなわち副要素を機縁として主要素を成り立たせることが、現実的な都市計画の対応として考えられなければならない。

以上のことから、都市の遊楽を担うのは副要素である「商業」であるという考えに至る。それ以後、石川は都市計画の重要な対象として商業に注目していくことになり、それは「盛り場

論」へとつながっていくのである。

### 3.2 盛り場の中心としての商店街

ここにきてようやく商業が上田市での経験以来、石川の展開する都市計画の主題となる。そこで、以下では石川が盛り場論の中心として、都市における商店街をどのように捉えていたのかをみていく。

石川は、都市を「人類の Community Center として」(石川、1930a、58 頁) 捉えた。つまり、都市は人々を結びつける賑やかさを有しており、それを担う商業こそが最も重要であると考えた。なぜなら『『買ふ』事は現代人の至上の悦楽であり、実は「分配と遊樂の人生の二部門をかね占めて」いることから、「商業街こそ現代都市存在の意義であり、そのキャスティングボード（ママ）」となるのである（石川、1928b、13 頁）。商業はこれまで「都市計画上の盲点」(同上) であったが、これ以降、その中心として盛り場論が展開されていく。

ここで、石川は商業に着目しているが、それがなぜ「商業街」（商店街）であったのか。たしかに、既述の上田市での経験というきっかけはあった。しかし、当時にはすでに百貨店が近代小売業として台頭しており、商店街を圧倒する存在であったはずである。それでも、石川が賑やかさを担う中心に商店街を位置づけたのはどのような理由によるのか<sup>12)</sup>。それについて、以下に二つのことを指摘しておきたい。

第一は、そもそも石川が郷土都市を基本的発想としていること。まず賑やかさに着目したのは、海外出張での経験から生活・人生中心の都市観の重要性に気づいたことによる。石川が見た歐州諸国では、広場やそのマーケットが賑やかさを担っていた。しかし、「徒らに西洋の形骸のみを追」(石川、1928d、17 頁) うのではなく、日本の文脈に沿った形で「広場の変形としての街路」(石川、1928a、22 頁) として、商店街を日本の広場に翻訳する。石川は「総てのものが郷土的でなければ栄へぬ筈の如く、都市計画も郷土的でなければなら」(石川、1928d、17 頁) ないとしており、したがって、その郷土性を百貨店ではなく商店街にみていたのである。

第二は、石川が捉える商業はあくまで都市計画からの視点であるということ、またそれが建築ではなく土木をバックグラウンドとしていたこと。彼は商店街商業者への講演のなかで、建築物として商店街を圧倒している百貨店への対抗手段は「只町を美しくする事で」あり、「綺麗な通りと云ふものはデパートの決して為し得られないもの」と主張する（石川、1936b、21 頁）。つまり、石川は点としての個別建築物の美ではなく、あくまで「街」という面的な総合としての美を重視していた。現に百貨店を「幼稚な大建築驚異時代の特産」(石川、1928b、15 頁) として積極的に位置づけていない。石川にとって重要なことは、単に商業が栄えることではなく、「街」が栄えることである。したがって、商店街の「街」としての側面を捉えていたのであった。

以上のように石川は、商店街が郷土的であること、そして街という側面を有していること、という点から都市の中心である盛り場として位置づけたといえる。以下では、その盛り場論がどのように展開されたのかについてみていく。

### 3.3 盛り場論における二つの視点とその担い手

商店街を主題にしている盛り場論は、石川（1929b）から論じられだした。これ以降、石川の関心の中心は盛り場となり、具体的にその内容が論考されていく。以下ではその主要な内容として三点述べる。第一は上の内容とも関連するが、「街」というある広がりをもった「総合」として捉えるということ。石川は盛り場を『『慰楽』を求め』て、人々が集まる「区域及その施設を総括」したものとする（石川、1932、94頁）。これは個店ではなく、その集積ないし区域を重視しているということである。なぜなら、盛り場に集まる人々の全員ではないにしても、その多くが個店ではなく、盛り場そのものを目的として集まると考えているからである。現に「西洋人は必ず銀座で物を買ふ理由は」（石川、1929b、51頁）銀座という街そのものへの信用があるためだとする。つまり「総ての売り物が、建築、設備等が総合し、この売場の背景となり気分を醸成して」<sup>13)</sup>銀座という盛り場を形づくっているのである。このことから、石川は「店より街に気をつけよ」とするが、さらにそのためには「街より都市の栄養状態に気をつけ」なければならないとして、より広い視点の必要性を指摘する（石川、1928b、52頁）。つまり、商業だけではなくそれが立地する都市そのものの繁栄が重要であるとの視点であり、このことはあくまでも都市や地域をベースにしている石川的発想の特徴だということができる。

第二は、「夜」に重点をおいていること。石川は、現代人の多くは昼間を労務の時間としているとして、それを「自分の体でもなく心でもない」（石川 1930、219 頁）状態とする。そのような「人間機械」の状態から解放され「本当の真人間に」回復できるのが、「夜の盛り場」<sup>14)</sup>での遊楽であるとする（石川、1929b、52 頁）。このような考え方には、石川の都市観からきていることが容易に理解される。つまり、夜の盛り場においてこそ遊楽が最も遂行されうるということである。しかし、それは単に夜だけを見ればよいということではなく、「その印象をやきつけられてこそ初めてヒルマの小売店街としても信用がついて來るので」（同上）ある。このように夜を重視していることから「夜の都市美」・「夜の都市計画」と称して照明方法や看板など、より具体的な思索を展開する（石川、1932、1933、1934）。また後にもふれるが、実際に石川は盛り場論の実践において照明技師など実務家とも活動しており（都市創作会、1927）、照明学会設立にも都市計画系で唯一かかわりをもっているほどであった（石川、1952）。

恐らく、石川の議論がモノ偏重にあったと誤解されていたのは、このような具体的なレベルまでを議論の対象としていたことが一つの理由であったと考えられる。しかし、これまでの内容からも明らかなように、石川は決してモノ偏重ではない。あくまでも盛り場の賑やかさを生み出すための具体性であり、実践レベルでの具体性であった。しかし、ここではその内容 자체が

問題の対象ではない。重要なのは「都市計画技術室より街頭へ」（石川、1933、148頁）という思いをもとにしての運動であるということである。つまり、それは石川があくまで現場を重視しており、いかに実践するかということに関心をもっていたということである。

第三の点についてふれる前に、以上に述べた二点から石川の視点の特徴を指摘しておく。まず一つが「街」として捉えることで、個店よりも街やそれが立地する都市レベルにまで視点を広げるということであった<sup>15)</sup>。その一方で、二つ目が「夜」を重視することで、具体的な店舗レベルでの照明などにも視点を向けていたということであった。つまり、どちらか一方に偏るのではなく、その両者を考慮していくことが石川の基本的発想である。また、それは単に両視点があるとしているだけではなく、「『その店』のある街が・・・賑へば賑ふ程、その母体である都市自体」（石川、1929b、51頁）も賑わうとして、それらが相互に関連していることを認識している。仮に法定都市計画をどちらかに位置づけるとすれば、あまりに都市レベルに偏りすぎていたということができる。そのことは都市を抽象的に捉えることになり、生活感のないものとしてしまっていた<sup>16)</sup>。それは「都市計画の技術家として・・・街路網、地域、区画整理の仕事では物足りない」くなり、結局「『都市計画』という華々しい名前を有ぢながら自分達の仕事がどうも此の現実の『都市』とドコかで縁が切れてる様な気がしてならない」ことになる（石川、1932、93頁）。だからこそ石川は、都市を人々によって生きられている空間として具体的に捉える「盛り場論」を開拓したのであった。

そこで彼がもう一つ重視したのが、盛り場論の担い手についてであった。これが、盛り場論の特徴の第三である。それは、法定都市計画が基本的には国の事業であり、したがって、その担い手は国の機関である都市計画委員会となるが、そのことが結局は「現実の『都市』とドコかで縁が切れ」た状態をもたらしていた。それに対して石川は、その都市において生活・人生を送っている「市民自身が考へなければならない筈だ」（石川、1928c、8頁）とする。すなわち「陶器職工ならば在来の都市計画家は素焼の瓶の『型』を設計して掛りに過ぎない。陶器をして芸術品たらしめる——『釉薬』をかけ模様を描く役は実は我々と丸で縁のない街頭に立ってる商店の連中」（石川、1930、93頁）が果たすべきだということである。石川は自身の掲げた盛り場論の実現にむけて、自らが主体となって積極的な実践を展開し、それを啓蒙していく。具体的には、名古屋の代表的盛り場の広小路と大須の各商店街において実践するが、それについては次節で述べる。ここでは、石川が盛り場論の担い手について具体的にどのように考えていたのかについて述べたい。

これまでの内容は、石川の問題意識から制度の不備を指摘する見方であった。しかし、それが制度だけの問題ではなく、行政に任せ切りになっている市民の問題でもあることに気づく。例えば自分の家であれば室内の調和を考えたり、少なくとも掃除など最低限の配慮をする。ところが「都市については、一家の人が一家の事について考へる様な、やり方では誰も考へてない」<sup>17)</sup>。このことから「『都市』と云ふものは・・・特に直に自己の生活たる可き市民が、親

表2：「名古屋をも少し気のきいたものにする」の会メンバー

石川 栄耀	都市計画地方委員会技師
原 文次郎	愛知県商品陳列所長
岡谷 惣助	岡谷合資会社代表社員
香取 五郎	名古屋市立工芸学校教諭
高松 定一	師定商店主
田邊 征中	陳列図案家
屋代 勝	名古屋商業会議所書記
古賀 行儀	名古屋高等商業学校教授
青山 光次	青山書店主
三浦 一	名古屋商業会議所書記長
足田 貞三	東京電燈株式会社技師
森 右作	東邦電力株式会社電燈課長
菅井 武亮	東邦電力株式会社技師

注：肩書きは結成当時

出所：都市創作会（1927）87頁より作成

表3：「名古屋をも少し～」の会の約束

会の目的は名古屋を自分の家の様に愛する人達が之をも少し気のきいたものにする様に、気のついたことを考へたり、はなしあつたりします。そして出来たら、その結果を各方面に助言したり、実現の出来る方法も採りたいと思ひます。  
会員の種類は同人、会員の二つにします。同人と云ふのは一種の世話人で、会員と云ふのはその都度臨時に飛入りの人です。  
会のきまつた仕事は、今のとこ、月に一回どこかへ集まって何か持ち寄りの題目について漫談会を開き、その結果を同人関係の各雑誌に発表したり、各方面に助言することにあります。又その時の都合により小さい旅行をしたり、市内を歩いたりする事もあります。

出所：都市創作会（1927）86-87頁より抜粋

身になってあけ暮れ楽しみ考へる事なしに、いつ市民の都市が出来様ものぞ」（同上、7-8頁）として、市民の取り組みが重要であることを訴えている<sup>18)</sup>。

石川は盛り場の商店主など市民をその取り組みに巻き込むための活動組織として「市民俱楽部」<sup>19)</sup>を提示する。具体的には「名古屋をも少し気のきいたものにするの会」が結成されるのである（都市創作会、1927）。同会は、1927（昭和2）年7月に石川を中心として名古屋商業会議所に集った多彩なメンバーからなる（表2参照）。それは、名古屋に愛着をもつメンバーが漫談会<sup>20)</sup>などをする集まりである（表3参照）。石川（1952）は「皆で隊を組み獵奇隊と称し、毎夜名古屋市のあらゆる方面を観察して歩いた。／或時は築港方面の遊郭にクリ出し、10人許りで遊女を質問せめにしたことさえあった」（40頁）と、当時の活動を振り返っている。これは、「市民よ。都市に対し意見の持てる様に、先づ（ママ）『都市とは何ぞや』の、勉強をしなければならない」（石川、1928c、8頁）ということの率先的な活動であった。その内容からもわかるように、石川は決して専門的な厳密性を要求していたのではなく、「市民よ童心たれ」として「童心的批評会」のような（同上、9頁）、遊樂をともなった活動を想定していたのである。それは、石川にとって都市計画技師という「官吏の本務以外」（石川、1928e、46頁）という位置づけであり、すなわち市民としての運動であった。

翌1928年には、商工会議所を中心に同会を基盤として名古屋都市美研究会が結成されている<sup>21)</sup>。さらに同研究会は同じ年に名古屋を代表する盛り場の広小路と大須のそれぞれに商業者たちをメンバーとする研究会をつくり、「名古屋をも少し～」のような批評会的組織から、盛り場づくりを実践する組織の段階へとはいっていく。以上のことからもわかるように石川の『都市創作』誌上での論考はまさに実践のなかで生み出されてきたものであった。そこで、以

下では盛り場論が具体的な盛り場においてどのように実践されたのかについてみていく。

#### 4. 盛り場論の実践－名古屋での取り組み－

##### 4.1 広小路－街並みの問題とその対応－

広小路<sup>22)</sup>とは名古屋駅から東に伸びている東西軸の幹線道路のことであり、当時としては路面電車やバスも通っている幅員約25mの大きい道路であった。その両側に店舗が集まって盛り場を形成しており、商店街としては広小路（栄町）通商店街と新柳町通商店街との二つから構成されていた<sup>23)</sup>。以下では両者を総称して広小路という。広小路はもともと名古屋城を中心とした碁盤割りの南端に位置する場末町であったが火除け地として道路全体が拡幅された。名古屋駅ができたことにともない官公署をはじめとした銀行や会社、百貨店などが集積し地域を代表する盛り場へと発展していた。商圏も名古屋市全域で、主に上・中流家庭の消費者を対象として名古屋における銀座という位置づけであった。

しかし、広小路はそうであったがために、逆に盛り場としての問題を抱えることになる。それは、特に昭和に入ってから銀行や会社など「近代高層建築ノ族生ノ為商店街トシテノ特色ヲ減ズ」（商工省商務局、1936、7頁）状況となりビジネス街化していた。昼間は企業労働者などが多く集まっていても、夜になると小売店舗以外の建物は閉鎖され人が寄りつかなくなる。なかでも銀行や保険など金融機関が多く、建物の規模が大きい分その影響も大きいものであった。その他に空地・空家の存在や、通り沿いにあった市役所と県庁が1938（昭和13）年に名古屋城付近へ移転することも決まっていた。広小路が抱えている最も大きな問題として、それら企業の建設のための板囲いであった。それら板囲いの存在が、代表的盛り場としての広小路の街並みを貧弱なものにし、賑わいの創出を阻害していたのである。

当時の惨状が「名古屋銀座街が『ビル』をベタリの板囲ひ」（『名古屋新聞』1928年5月2日付）との見出しで伝えられている。さらに、1928（昭和3）年11月に御大典<sup>24)</sup>が行われることが決まっていたことから早急な対応を迫られていた。このことから前述の広小路研究会が組織されたのである。また、同記事で石川は板囲いを後退させそのスペースを露店やショーウィンドーに貸し出すか、せめて広告の場とすべきだと訴え、夜間には電灯など盛り場を明るくするようにしてほしいとの要望を述べている。以後、同研究会は板囲いによる街並み問題の対応を具体的に進めていく。

まず同研究会が主体となり商工会議所・廣告協会・照明技師・名古屋都市美研究会の各関係者が支援する形で進められていく。その内容として次の四点があげられている（『名古屋新聞』1928年6月9日付）。第一に、板囲いは後退させてショーウィンドーか露店用地とするよう各企業に申し入れる。第二に、街路上に出る看板が課税対象となっており賑やかさ創出の阻害となっていることから、その規定の撤廃を市に嘆願する。第三に、京都の四条通りを見本として、人通りが最も多くなる夕方の時間帯を公共交通以外の車両通行禁止とするよう県に嘆願する。

第四に、高層建築物の屋上に照明装置を設置するよう交渉する。これは実際に、明治銀行と東邦電力に交渉し屋上のイルミネーション装置や広告設置の了解をとっている。

しかし、すべてが順調に進んでいたわけではなかった。広小路は依然として「建物に挟まれて街路は都市の谷底」（『名古屋新聞』1929年5月3日付）にあると記事にされるような状態だった。既述のように、街並み問題において広小路では発展会幹部の努力や研究会など支援してくれている肩入れ連が多いにもかかわらず事態はなかなか改善の芽をみなかった。それに対して同記事では広小路にはもっと「ルパン味とナンセンス味が」必要であり「継続的なノイズを立てよ」と訴えている（同上）。

その実践として、名古屋新聞社の主催で1929年8月5-30日の夜間に「納涼マーケット」という大イベントが開催される（『名古屋新聞』1929年8月4日付、6日付）。これは、街並みの問題にもなっていた空地を利用してビヤホールやカフェを出店するというものである。またその他に商店街商業者たちもその空地を利用して、呉服から日用雑貨、食料品など様々な商品を出品した。6日の同記事では初日の様子を「開場と共に廣プラ連の足は引きも切らず吸ひ寄せられて場内はひしめき合ふ有様、ことに出陳商店が腕をしごいての廉売の事とて、いづれも入場者の購買心をそそって飛ぶやうな売れ行きで早くも第一夜から大変な景気を見せた」として「夜の散歩者を集めて大盛況」と賑わい振りを伝えている（同上、1929年8月6日付）。

さらに、翌1930年7月15-16日には「広小路祭」が開催される（『名古屋新聞』1930年6月29日付、7月16日付）。これは石川を中心に名古屋都市美研究会が主催となって「市民的カーニバル」として開催された。内容としては各店舗が提灯で飾りつけられ謝恩売出をする他、「広小路発展にちなむ懷古的な趣向をこらした陳列をしてこれをお客様の投票で懸賞競技にする」というものである（同上）。さらにメインの企画として「広小路全町が各町毎に造りものを出し、浴衣がけ、木遣りで此れを曳きだす。／数十台の造りものゝ車、その先頭に立つのが松坂屋バンドで夜間七時位からそろって車道を往復する」（石川、1938a、61頁）という行列が行われ遂には電車をとめるほどであった。以上のような種々企画が実施され、広小路祭は「殺人的雜踏」をみせたと同新聞で報じられていた。このように広小路祭が成功裡にあったことから、さらに翌1931年にも第二回が開催され、今度は商店街発展会と名古屋新聞社の共催で行われることになった（『名古屋新聞』1931年6月29日付）。

以上、広小路では街並みの問題が起こって以降、石川や広小路研究会などが中心となって連続的なイベントを開催し、盛り場としての広小路を復興させようとしていった。たしかに最初の納涼マーケットは名古屋新聞社が主催となっており、広小路研究会や石川がどれだけかかわっていたかは不明である。しかし、石川（1952）は「ジャーナリズムが極力好意をよせてくれた」（40頁）おかげで市民との関係も良くなり、照明・商店指導や様々なイベントに無条件に協力してくれたと述べていることから、同イベントについても同研究会や石川が何らかのかかわりをもっていたことが推測される。翌年の広小路祭開催では名古屋都市美研究会が主催となって

おり、第二回からは商店街発展会と名古屋新聞社の共催となっている。このことからも商店街や新聞社などが何らかの協働関係にあったと考えるのが現実的であろう。また、これらイベントを通して名古屋都市美（広小路）研究会や商店街発展会といった市民組織がより前面にでてきたと言えるのではないだろうか。つまり、これらはまさに石川が掲げていた市民主体の盛り場論の実践であったということができる。

しかし、これですべてが順調に進展したわけではなく「都市美研究会の解散と共に三回余にして止ん」てしまい<sup>25)</sup>、結局それは「お祭りの日の売れぬ事に対する不満と、本気になり切れぬ事より来る出費の半端は市民を喜ばず趣向を産むに至らず市民にあきられ始めた結果にもよるのであろう」（石川、1938a、62頁）とされている。このことは、広小路では石川の愛知県在任中に盛り場論が浸透しきらなかったということなのかもしれない。

#### 4.2 大須一商店街の拡張と賑わいの創出－

大須<sup>26)</sup>は広小路の南の市内中央に位置しており、大須観音の門前町として発達した地域一帯を指す。また、広小路を名古屋の銀座とすると、大須は名古屋の浅草として位置づけられており、商圈は名古屋全域の主に中・下流家庭の消費者が顧客であった。また、商店街としては大須観音に隣接した大須門前（仁王門）通商店街、その東に位置する万松寺通商店街を中心として、他いくつかの商店街で構成されている<sup>27)</sup>。前者は古くから芝居小屋が建ち並び、その他には映画館、喫茶店や料理屋など典型的な盛り場を形成していた。後者は既製洋服店を中心とした業種構成で低廉価格を特長としており、同種商品を取り扱う商店街として位置づけられていた。以下では、これら地域一帯の商店街を総称して大須という。

大須はもともと上記のように芝居小屋などが集まった盛り場であったが、それを最も盛り場たらしめていたのは遊郭の存在であった。しかし、その遊郭は県令で1923（大正12）年4月から現在の中村区に移転したことから、大須は「一時命を断たれた様な淋しい地区に化した」（大大須振興会、1938、35頁）ほどであった。これに対して、大須の中でも遊郭に最も近接していた大須門前通商店街の商業者たちが具体的な取り組みとして「変装市場」というイベントを企画する（商工省商務局、1936：平野、1980）。これは毎月18、28日を縁日の売出しとするというもので、遊郭が移転した年の暮れから毎月実施された。しかもただの売出しではなく、自身の取り扱っている商品以外の商品で売出すといった趣向を凝らしている。それは、事前に各店の売出し商品を審査するというほどの徹底したものであった。また、翌1924年には新愛知新聞社主催の御成婚記念奉仕廉売デーが催されたのをはじめとして、十姉妹の品評会、キネマ俳優探し、運だめし週間、判じ絵、店頭生花会、街頭漫画展覧会など趣向を凝らしたイベントがほぼ毎月にわたって開催された。さらに1927年には市電の運賃が一律6銭となったことから、それライベントは予想をこえる成功であったという（平野、1980）。

既述のように1928年11月には御大典があり名古屋全体が祝賀ムードの中、門前町（本町）

通りもそのコースに入っていたことから、より活発なイベントが行われていく。また御大典に先立って、大須にも広小路同様に商業者や住民を中心とした大須研究会が結成される。そこでは「遊郭移転以来、その繁栄の維持に極力つとめてきたが、今度さらに積極的にその発展」（『名古屋新聞』1928年5月6日付）を支えるための方策について話し合われた。その内容とは公園の設置、大須の品位向上、街路の新設、大須地域の拡張といった今後の大須のさらなる発展を期すものであった。これら計画を具体化すべく大須の再興に向けての取り組みが進められていく。

そのなかでも1931年5月に不況からの復興<sup>28)</sup>と大須発展を目指した「大須盛り場の昭和初期を飾る一大行事」（平野、1980、286頁）として、数十年ぶりの大須観音の開帳が催された。それは開帳を中心として約3週間にわたって様々な企画が催され、仮装行列や季節外れの盆踊りなど「エロ・グロ・ナンセンス」（同上、294頁）を前面にだしたものであった。同イベントは大須観音を中心に地域全体の連携で取り組まれたものであり、それは「前評判も上々で・・・大須界隈は人出で身動きも出来ぬ」（同上、292頁）ほどの盛況ぶりであった。そして、同年7月には大須「二十ヶ町と宝生院（大須観音－筆者）との提携による大盛況の成績に鑑みこの際・・・各町歩調を一にして大須連合会を結成する」（『名古屋新聞』1931年7月22日付）ことになった。同会役員は大須観音の住職を会長として各町二名ずつの幹事からなり、顧問には石川の他に県知事、市長、名古屋連合発展会会長、地元警察署長、新愛知新聞・名古屋新聞の両社長が就いた。これによって大須は街全体として取り組む体制をつくり、これ以降は同会を中心として取り組まれていく<sup>29)</sup>。

以上の賑わい創出の取り組みはイベント中心についてであり、どちらかと言えばソフト事業に位置づけられるものであったが、以下では街路の設置など大須を拡張させるハード中心の取り組みについてみていく。当時の大須北部は商品陳列所（1930年閉鎖）と中公設市場がある以外は万松寺と総見寺の敷地で入り組んだ狭い街路しかなく、商店街の重心は万松寺通りを境として大須門前通りがある南部にあった。したがって大須発展のためには北部の整備が重要であった。まず、先述の大須研究会でも話し合われた街路の新設として1932年に「食傷新道『うまいもの横丁』」（石川、1938a、59頁）が新設された。これは大須観音北側から大須門前通りと並行した浅間小路と大須門前通りを結ぶ路地に「大須カラーの食べ物店をならべ」なものであり<sup>30)</sup>、北部整備の皮切りとしてこれ以降「大須面目の一新」が図られていく（『名古屋新聞』1928年5月6日付）。

北部整備で最もインパクトのあったものが「赤門通り」の新設であった（大大須振興会、1938：石川、1938a：平野、1980）。赤門通りは中公設市場のある大須北部を東西に横断する通りで門前町通り、裏門前町通りといった大須を縦断する街路と交差することから大須全体の回遊性を高めることが期待されていた。これは三輪町線区画整理組合（1932年）を設置し、県や三輪神社からの補助、地主負担などによる経費で1933年に開通された。当初、車馬交通

が多かったこともあり「何をやっても“あかんもん通り”」(平野、1980、417頁)と揶揄されることもあったが、開通後ほどなくして「大須興行街を形成するに至」(大大須振興会、1938、7頁)るほどの賑わいとなった。それはカフェや飲食店、劇場だけでなく「赤門娯楽デパート」といった子供向けの娯楽施設によって、大人の娯楽イメージが強かった大須に新たな盛り場としての側面を加えたのであった<sup>31)</sup>。

赤門通りと最も影響を与えたのは新天地通りの発展である(平野、1980)。新天地通りは万松寺通り東部から北にのびる赤門通りと交差する街路のこと、映画館・劇場を中心として発展した。もともとは万松寺の敷地で山林であったが、赤門通りとほぼ同時期に新天地通りでは万松寺が中心となって整備を進めていた。1935年あたりには商店街としての体裁がほぼ備えられたことで、相対的に南・西部にあった重心が北・東部にも移り、大須地域全体の発展がもたらされた<sup>32)</sup>。その他のハード事業として街路灯・ファサード・アーケード<sup>33)</sup>も構想され(石川、1938a)、特に万松寺通り、新天地通りでは京都の新京極に倣った整備をしたり、街路灯ではそれぞれの通りが宝珠をあしらったものなど趣向を凝らしたものを見た。なかでも大須門前通りの入り口には7-10尺の大提灯が設置され大きな話題をよんだといわれている(『名古屋新聞』1935年4月5日付)。

以上のように大須はソフト・ハード両方におよぶ積極的な取り組みを展開していった。それは遊郭移転による打撃をきっかけとして取り組みが始まった。しかも、大須は広小路と違い石川の東京移転後も積極的に取り組まれたのである。そのなかで大須は遊郭による繁栄から、新たな賑わいを築くことで盛り場を形成していったのであった<sup>34)</sup>。

## 5. おわりに

本稿では石川の名古屋時代に焦点をあてて、都市観の形成から盛り場論の生成とその実践をながめた。その軌跡から、盛り場論とは都市と商業の接点を都市計画の側から探った取り組みであったということができる。当然そのまま現在に適用できるというのではないが、今日、商業とまちづくりの問題が重視されるなかで、両者の接点を探る考え方として非常に重要である。その意味で盛り場論は両者の接点の、また商業者によるまちづくり活動の、1つのモデルとして位置づけることができると言える。

以上の石川の盛り場論から、現代の商業とまちづくりという課題において何を学び取ることができるか。結論からいえば、それこそが「抽象的次元から現実的次元への転換」である。石川の思索や活動に通底していたのは、まさにこれであった。

以下、このことについての意義を2つの点から述べて結びとする。第一は、理論や制度が暗黙裡に抽象的なかたまりとして想定していた都市を、現実的次元で捉えなおしたことである。つまり、抽象的に捉えることで単純な二分法に陥りやすいところを常に現実の次元で捉えなおし、その具体的な取り組みをしていくことである。例えば、都市をあらためて郷土性をもった

街の集合と捉えなおしたことで、同様に小売業を、賑わいを担う存在として具体的に捉えることができた。このことは「都市と小売業の接点」といったとき、石川が都市を現実次元で捉えなおしたことと同様に、商業・流通論においても小売業を現実次元で捉えなおすことを求める。なぜなら、盛り場論でみられた都市における小売業とは、「本質的」とされる売買の架橋という側面だけでなく、街並み・交流・賑わいなど多様な側面をもっているからである。しかも、その次元では後者の側面こそがむしろ重要であった。つまり、商業・流通分野はその視角を上のような多様な側面にまで広げ、それが実際の都市においてどういう役割を果たしているのかを捉えることが重要である。まちづくりという現実的な課題においては、そうすることなしに実りある成果を期待することは決してできないであろう<sup>35)</sup>。

しかし、以上のことは決して容易なことではない。なぜなら現実次元で捉えようとする瞬間に、それらは各現場での個別の事象となり、具体的な典型がないことを意味するからである。このことが現在においても成功事例が多くないとみられる理由のひとつであろう。では現実次元で捉えることが必要であるとして、そのためにはいったい何が重要であるのか。すなわち、それこそが市民による主体的な取り組みであり、これが第二の点である。

もはや繰り返さないが、広小路や大須での盛り場論の実践は商業者による商業のための運動では決してなかった。同様に、制度や行政に任せ切りにするのではなく、石川自らも「官吏の本務以外」としたように市民が主体となって取り組む運動であった。つまり制度はあくまで枠組みであって、そこで具体的に生活する市民こそが「都市とは何ぞや」と問い合わせながら取り組むことが重要であった。このことは当時と地方分権が全く異なる現在であれば、なお重要であり、その意味で盛り場論は「市民参加」の先駆的事例であったことができる。

## 注

- 1) そのなかにあって、例えば石原の一連の論考は都市における小売業を商業の側から探る重要なものとして位置づけられる（石原、2005abcd）。
- 2) 盛り場論はこれまで主に東京への移転以後が断片的に取り上げられていたが（吉見、1987：橋爪、1995）、名古屋時代の盛り場論の形成の時期は最近になってようやく中島（2002）（2005）：山田（2003）によって取り上げられた。中島は盛り場論を都市美運動の一環と捉え、それを都市計画史に位置づけてその現代的意義を考察し、山田は地理学の視点より石川の盛り場論という都市思想を空間論から捉え、それがどのような空間の実現を目指したのかを考察している。
- 3) 西山（1993）によると名古屋時代（1920-32）、東京戦前時代（1933-45）、東京戦後時代（1946-51）、早稲田時代（1951-55）にわけられる。
- 4) わが国都市計画制度の歴史については、例えば石田（1987）：渡辺（1993）を参照。
- 5) 既述のように、旧都市計画法の制定以前には東京市區改正条例（1888年）という制度がすでに存在していた。また同法制定の前年には、同条例を東京以外にも準用できる法律が制定されていた。そして、実際に東京以外の6大都市への準用が指定されていたにもかかわらず、その翌年に同法が制定された。その理由として、石田（1987）は同条例など「それまでの制度は江戸時代から形成されていた市街地を

- 時代にあわせてつくりなおすという『市街地改良』型の制度でしたから、これを他都市に適用するだけでは時代の要請に応えることにはならなかった」(113頁)ためと指摘する。
- 6) それは「美はあく迄、その環境の『実子』でなくてはならない。／その『地』から生れてた物でない『養子』であって何で輝け様。どうやってその土地から生れた人達の感情内容を盛れ様」(石川、1927d、4頁)という発言からも容易に理解される。
- 7) 「本会ハ都市計画ニ関スル諸般ノ事項ヲ研究調査シ都市ノ改良発達及地方ノ福利開発ニ貢献スルヲ目的ト」しており、主な事業として毎月1回の例会、機関誌『都市創作』の発行、図書の刊行、講演会・講習会・展覧会などの開催があげられている。また会員も100名以上を擁していた。会則の詳細は、都市創作会(1925b)52頁を参照。
- 8) その他に「聚落」や「人間の巣」といった表現も用いている。詳細は石川(1926b)19-24頁:石川(1927a)45-46頁を参照。
- 9) 具体的には3万人程度の人口で、最大でも10万未満とされている(石川、1926a)。このような発想は田園都市論の基本的発想である小規模性の影響であることが容易に推察される。
- 10) 石川は法定都市計画を超えるために学問としての都市計画も、さらに新たな方向性を見出していくなければならないと主張する。そして、その方向性として次の6点を示す(石川、1927b、6-7頁)。  
 ①都市の文化・哲学上における位置づけ及びその結果から要求されるべき施策の研究  
 ②都市構成の人文地理学的研究  
 ③都市の産業機能としての能率的構成を都市計画物理学的・都市計画心理学的側面からの研究  
 ④人類の文化生活の場としての美的構成学  
 ⑤以上を総合した能率構成学  
 ⑥以上のことを現実で展開するための権利制限・財政の研究。以上の6点からも理解されるように、人文系の要素がかなり重視されていたことがわかる。
- 11) この理由として、例えば渡辺(1993)によるわが国近代都市計画史における次のような指摘が興味深い。それは、わが国における近代都市計画の成立には欧米の近代都市計画が多大な影響を与えたことはよく知られている。の中でも「最大のものの1つに田園都市論がある」(41頁)。しかし、それは田園都市論の代表的論者であるハワード(E. Howard)によるものではなくセネット(A. R. Sennett)によるものだった。このセネットはエンジニアであり、田園都市論の主流とは違う「もっぱら工学的・施設的」(46頁)側面を中心にしていた。このことは日本において田園都市論がかなり偏った内容で伝播していたことを意味する。また実際に、当時の内務省関係者も田園都市の視察でレッチャースに訪れているが、それに対する理解は表面的なものに留まり、歴史的な背景や都市開発の哲学にまでは考えていなかつた。以上のような田園都市論の偏りは、当然わが国都市計画の特徴に影響を与えるだろう。そして、そのような影響が先に述べたような都市の捉え方をもたらしたと推察される。
- 12) 実際に石川は商店街支援に積極的にかかわっていく。それについては本文でも次節で述べるが、その他に例えば、商工省が学識者や専門家を招いて中小小売業向けに講演会を開いており、石川もその講師の一人として講演を行なっている(石川栄耀『商店街盛場』の研究及其の指導要項 小売業改善資料七号)商工省商務局、1935年)。また、各地の商工会議所による講演会においても石川の講演が行なわれている。例えば、石川(1936b)(1938b)を参照。
- 13) 石川栄耀「製法秘伝盛り場読本 第一卷」『名古屋新聞』1930年3月4日付。
- 14) 「夜の盛り場」の他に「夜の都市美」、「夜の都市計画」といった用語も使われている(石川、1929b、1930、1932)。
- 15) 例えば、盛り場のタイプ(形状・規模・業種構成・商圏など)や分布などを詳細に分析して、そこに何らかの規則性があるのかを見出そうとしている。こういった分析視角は、石川(1929b)から、盛り場論の集大成とされる石川(1944)まで一貫してもち続けられており、このこともモノ偏重と誤解され

た理由の一つであると考える。

- 16)しかし、石川は決して都市計画そのものを不要としているわけではない。それは「何よりもカラダ自身がやせてゐてはだめだ・・・町全身の栄養法を考へなくてはならぬ」として、「その意味でよき都市計画」が「よき盛り場製造法となる」としていることからも理解される（石川栄耀「製法秘伝盛り場読本 第五卷」『名古屋新聞』1930年3月8日付）。
- 17)石川（1928c）5頁参照。この理由として、結局は市役所など行政に任せ切りになっているということが指摘されているが、その根本的な原因として「最も大切な事は、今日の日本人は、家の中さへ立派にしとけば、戸外生活等には大して興味を有ってない」（石川、1928c、6頁）ということが言われている。このような住まいにおける内部空間と外部空間への捉え方は現在においても同様のことが言われている（芦原、1979）。また近年、景観論においては2004年の景観法施行をうけて、私的空間としての個別建築物と公共空間としての景観（街並み）との関係・調整についてや、また公共空間としての景観における「都市美」とは何かについての議論がなされている（西村編、2005）。
- 18)同様に行政に対しても『『頼まれた』『届け出られた』件の『責任』を果す丈の、木偶の古さから脱却して、少くも母の心、を悟らふではないか。母としての市役所、県庁を創造し様ではないか』（石川、1928e、46頁）として、積極的な取り組みを訴えている。
- 19)石川（1928c）は、市民俱楽部として「都市批判会」「遊楽連盟」「隣人俱楽部」といった三種の組織を例示している（5-14頁）。
- 20)石川は同会の漫談会だけに限らず、様々な機会で座談会を催しており、その模様が新聞で報道されている（『名古屋新聞』1928年10月22日付、1929年6月16日付）。
- 21)同研究会メンバーの詳細はわからないが、「看板及ショウキンドウの研究者の群」（石川、1928e、47頁）としていることから「名古屋をも少し～」の会メンバーが関わっていたことが予想される。また、同研究会の活動として盛り場への働きかけの他に、緑化運動が展開されていた。その内容として公園の設置・街路樹の保護・歩道の設置などがあげられており、石川がその骨子案を発表したことが新聞に報道されている（『名古屋新聞』1930年4月13日付）。
- 22)以下、広小路の概要は基本的に商工省商務局（1936）：石川（1938a）：名古屋市（1954）（1955）：山田（1994a）を参照。
- 23)広小路通商店街の構成は衣料品（24）、食料品（19）、住料品（5）、文化品（31）、生産用品（11）、百貨店（2）、飲食・サービス（26）の合計118からなる。その他に、金融関係、病院、社寺、空地・空家で25あり、その内、金融関係（保険含）は16、空地・空家は5となっている。新柳町通商店街では衣料品（36）、食料品（22）、住料品（8）、文化品（24）、生産用品（1）、飲食・サービス（34）の合計125からなる。その他に、金融関係、病院、社寺、空地・空家で34あり、その内、金融関係（保険含）は21、空地・空家は7となっている。また、商店街組織としては栄町発展会（1920年）、新柳町発展会（1926年）が設立されている（商工省商務局、1936）。
- 24)天皇即位の祝典など諸行事が行われるため京都へ向かうのであるが、当時は移動時間もかかることから、途中の名古屋で宿泊することになっていた。その名古屋宿泊の際に、名古屋城離宮までのコースが広小路、門前町（本町）通りとなっていた（平野、1980、277-285頁）。そのことから、周辺地域の整備などが盛んに行われており、広小路においても同様にその必要性が叫ばれ、板囲いが差し迫った問題となっていたのである。なお、門前町（本町）通りはこの行事以後「御幸本町通り」と呼ばれるようになるが、本文では門前町（本町）通りのまととする。
- 25)広小路祭は1935（昭和10）年12月時点での商店街調査では、まだ共同事業としてあげられている（商工省商務局、1936）。そして、名古屋都市美研究会は同年4月に名古屋都市美協会に改組され、石川

は1933（昭和8）年すでに東京へ移転していたが、同協会の発会式で講演するなどのかかわりをもっていた（『名古屋新聞』1935年4月5日付、7日付）。しかし、同協会はそれほど成果をあげられていなかつたことも指摘されていることから（三堀、1988）、恐らく広小路祭は商店街調査の1935年が最後であったと考えられる。

- 26) 以下、大須の概要是基本的に商工省商務局（1936）：石川（1938a）：大大須振興会（1938）：名古屋市（1954）（1955）：平野（1980）（2005）：山田（1994b）を参照。
- 27) 大須門前通商店街の構成は衣料品（17）、食料品（8）、住料品（2）、文化品（14）、劇場・映画館（3）、飲食（12）となっている。劇場・映画館については同商店街に属さないものを含めると15となる。また、大須観音境内の露店が別に53店ある（商工省商務局、1936）。万松寺通商店街の詳細はわからないが、1938（昭和13）年時点で138店舗中69店舗が衣料品となっている（名古屋市、1955、添付資料：平野、1980、79-86頁）。商店街組織としては、それぞれ大須門前大商組合（1896年）、万松会（1905年）を設立している。また上記以外の主な商店街として、家具と仏具を中心とした裏門前町通り、問屋を中心とした門前町（本町）通りがある。また名古屋の中心的な公設小売市場の中公設市場も大須に位置している（名古屋市、1954）。
- 28) 当時は全国的に金融恐慌（1927年）、世界恐慌（1929年）、昭和恐慌（1930年）など厳しい不景気であった。そのため大須においても遊郭移転後の活発なイベントが成功しているとはいっても、「大須もこのごろメッキリさびれてきた」（「盛り場復興座談会」『名古屋新聞』1932年4月12日付）ことから安物しか売れないとして、依然として厳しい状況にあることには変わりなかった。
- 29) 例えれば大須観音境内を利用した盆踊り大会が同年8月より恒例行事として実施されていくが、これは大須連合会が主催となっている（『名古屋新聞』1931年7月22日付、1932年8月14日付）。既述のように広小路祭は石川の東京移転で立ち消えになったのに対し、大須では「当初余り円滑に進まぬかに見えたが観音堂前に舞台を造り各町の盆踊り競技をする事が興を呼び今日尚一つの名物とし年々盛んになって」（石川、1938a、62頁）いったのであった。
- 30) 石川（1938a）によると「うまいもの横丁」は名古屋で一流料理店の出店によって成立するもので、それは東京においてもようやく現れ始めているような先駆的なものであったが、「先駆であり過ぎて目下先駆者の悩みを悩んでる」（59頁）として成功には至らなかったようである。
- 31) 赤門通りによる大須北部の発展はそれだけでなく、大須観音の北の墓地の跡地を利用した宅地開発など、さらに北部発展の勢いを加速させたのであった（石川、1938a）。
- 32) また大須門前通りは門前町通りまでしか横断していなかったが、1928年の段階ではすでに東に向けて延長した街路（現在の東仁王門通り）の計画がもたれていた（『名古屋新聞』1928年5月6日付）。
- 33) 実現はしなかったが、アーケードはガラス張りなど奇抜なアイデアが出されるほど積極的に取り組みがなされていた（『名古屋新聞』1928年5月6日付）。
- 34) これ以降、大須は戦時体制に入るまで栄えていく。遊郭中心の繁栄時代を第一の繁栄期とすれば、遊郭移転から戦時体制に入るまでを第二の繁栄期ということができる。そして大須は戦後にも再び衰退から復興するのであるが、それは第三の繁栄期といえるだろう。第三の繁栄期についての詳細は濱（2003）を参照。
- 35) このことは商業だけに限らず、「まちづくり」という総合性を有する取り組みにかかる分野であれば必要なことと思われる。恐らく、そのような各専門分野は、現実次元では果たしているが、抽象化され暗黙的に捨象されている側面を有しているはずである。これから求められるのは、そういった側面を抽出し、分野間の縦割りを越えて相互の連携を図ることだということができる。

【付記】本稿は『大須大福帳』著者の平野豊二氏より、大須の歴史について、資料の提供・在処等についてご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。なお、引用文についてカナは原文に従ったが、旧漢字は新漢字に改めている。

＜参考文献＞

- 芦原義信（1979）『街並みの美学』岩波書店（岩波現代文庫、2001年）。
- 石川栄耀（1925）「郷土都市の話になる迄」『都市創作』（都市創作会）第1卷第1号、17-22頁。
- （1926a）「都市の味」『都市創作』第2卷第4号、2-15頁。
- （1926b）「聚落の構成」『都市創作』第2卷第5号、15-24頁。
- （1926c）「設計室より—同じ道を歩む人の為に—」『都市創作』第2卷第9号、32-47頁。
- （1927a）「小都市主義への実際」『都市創作』第3卷第1号、40-60頁。
- （1927b）「都市計画学の方向、その他」『都市創作』第3卷第8号、2-7頁。
- （1927c）「スケッチ・ブックより」『都市創作』第3卷第8号、8-19頁。
- （1927d）「都市風景の技巧 その三」『都市創作』第3卷第12号、1-3頁。
- （1928a）「都市は永久の存在であらうか」『都市創作』第4卷第1号、18-31頁。
- （1928b）「都市計画街路網の組み方」『都市創作』第4卷第3号、6-25頁。
- （1928c）「市民俱楽部三相」『都市創作』第4卷第4号、5-14頁。
- （1928d）「郷土都市の話」『都市創作』第4卷第7号、15-33頁。
- （1928e）「地価の考察その他」『都市創作』第4卷第8号、39-47頁。
- （1929a）「都市を捉へる人」『都市創作』第5卷第1号、55-57頁。
- （1929b）「夜の都市美—漫步街の研究—」『商店界』（誠文堂）第9卷第1号、49-56頁。
- （1930）「夜の盛り場の種々相」『都市問題』（東京市政調査会）第11卷第2号、58-66頁。
- （1932）「『盛り場計画』のテキスト—夜の都市計画—」『都市公論』（都市研究会）第15卷第8号、93-105頁。
- （1933）「盛り場のテキスト補追—ショウキンド指導手引き—」『都市公論』第16卷第10号、131-148頁。
- （1934）「盛り場並主要商店街に対する二三の提案」『都市問題』第19卷第12号、87-94頁。
- （1936a）「都市計画に於ける保健問題—併せて本邦都市計画に於ける非生産部門の展開を観る—」『都市問題』第23卷第2号、163-178頁。
- （1936b）「商店街に於ける最近の動向」『横浜商工月報』（横浜商工会議所）第21号、16-25頁。
- （1937）「都市美運動の精神部門への展開」『都市美』（都市美協会）21号、44-46頁。
- （1938a）「盛り場風土記—『盛り場の研究』第一部—」『都市公論』第21卷第11号、26-68頁。
- （1938b）「商店街の構成」東京商工会議所編『商業経営指導講座』第1巻、守山書店。
- （1944）『皇国都市の建設』常盤書房。
- （1952）「私の都市計画史1~5」『新都市』（都市計画協会）第6卷第4号、第5号、第9号、第11号、第12号（『都市計画』No. 182、1993年、31-59頁）。
- 石田頼房（1987）『日本近代都市計画の百年』自治体研究社。
- 石原武政（1994）「規制緩和と流通論の課題」『慶應経営論集』（慶應義塾大学）第12卷第2号、21-34頁。
- （2005a）「売買集中の原理の外部性」『経営研究』（大阪市立大学）第55卷第3・4号、1-18頁。
- （2005b）「小売業における売買集中の原理の作用様式」『商学論究』（関西学院大学）第52卷第4号、1-18頁。

- (2005c) 「小売店舗の外部性としての街並みと商店街」『経営研究』第56巻第1号、71-92頁。
- (2005d) 「小売業における店舗規模と外部性」『経営研究』第56巻第2号、1-29頁。
- 川上為治 (1937) 「商店街調査を終わりて」『商業組合』(商業組合中央会) 第3巻第1号、69-82頁。
- 川上秀光・新谷洋二・石田頼房・広瀬盛行 (1993) 「座談会 石川栄耀と日本都市計画」『都市計画』(日本都市計画協会) No. 182、185-195頁。
- 大大須振興会 (1938) 『日本の大須 今と昔』。
- 商工省商務局 (1936) 『名古屋市内商店街ニ関スル調査』。
- 都市創作会 (1925a) 「巻頭言」『都市創作』第1巻第1号、頁数無し。
- (1925b) 「会報」『都市創作』第1巻第1号、51-56頁。
- (1927) 「実際化運動一本会実際化運動部後援報告」『都市創作』第3巻第8号、86-88頁。
- 桙内吉胤 (1929b) 「商店街の美と雑景」『商店界』第9巻第5号、18-19頁。
- 中島直人 (2002) 「石川栄耀の都市美運動に関する研究」『都市計画論文集』(日本都市計画学会)、37号、523-528頁。
- (2005) 「日本の都市美運動－市民社会への精神史－」西村幸夫編『都市美』学芸出版社。
- 名古屋市 (1954) 『大正昭和名古屋市史 第3巻 商業編上』。
- (1955) 『大正昭和名古屋市史 第9巻 地理編』。
- 西村幸夫編 (2005) 『都市美』学芸出版社。
- 西山康雄 (1993) 「石川栄耀の都市計画観」『都市計画』No. 182、200-201頁。
- 橋爪紳也 (1995) 『にぎわいを創る近代日本の空間プランナーたち』長谷工総合研究所。
- 濱 満久 (2003) 「商店街におけるまちづくり活動について－名古屋市大須商店街の復興過程を事例として－」『経営研究』第54巻第1号、133-154頁。
- 平野豊二 (1980) 『大須大福帳』双輪会。
- (2005) 「昭和の大須の盛り場」『自然と文化』(日本ナショナルト拉斯) 77号、4-13頁。
- 三堀三郎 (1938) 「名古屋市に於ける都市美運動の状況」『大阪』(大阪都市協会) 第4巻第7号、12-14頁。
- 山田朋子 (1994a) 「都市の近代化における『盛り場』の位置づけ－名古屋の事例から－」『日本学報』(大阪大学) 第13号、123-145頁。
- (1994b) 「盛り場に住む人々にとっての『近代化』－大正・昭和初期の名古屋市大須－」『待兼山論叢』(日本学篇) (大阪大学) 第28号、31-46頁。
- (2003) 「石川栄耀の盛り場論と名古屋における実践」『人文地理』(人文地理学会) 第55巻第5号、22-44頁。
- 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマトゥルギー』弘文堂。
- 渡辺俊一 (1993) 『「都市計画」の誕生』柏書房。
- (2001) 「市場による都市づくり政府による都市づくり市民社会による都市づくり」『都市計画』No. 234、3頁。